

秋田経済同友会は「松くい虫対策についての緊急提言」をまとめて 10 月 27 日、県に提言書を提出、早期の対策強化を求めた。

県庁を訪れたのは佐藤暢男代表幹事と御牧平八郎代表幹事の二人。農林水産部長室で竹村達三農林水産部長に提言書を手渡した。清水邦夫農林水産部森林技監らも同席した。

席上、佐藤、御牧の両代表幹事は「県や市町村はそれなりの防止対策を講じているがなかなか成果が目に見えていないのが現状。19 年には秋田わか杉国体があり、20 年には全国植樹祭が予定されている。経済同友会としてもできることは協力していくので、県が主導してみすぼらしい姿をさらしている被害木の処理、そのうえでの植林などにさらに積極的に取り組んで欲しい」と訴えた。

これに対して竹村部長らは「苦しい財政事情の中だが緊急性のあるところから防除対策などに取り組み、努力している。要望の趣旨は十分理解できるので知事にも良く伝え、予算措置を含めた対策をさらに検討していきたい」と述べた。

松くい虫対策についての緊急提言

秋田県内で日本海沿岸部の松林を中心に、松くい虫の被害が確認されて 20 年以上が経過しました。拡大する一方のその惨状はおぞましい光景であり、見るに忍びなく、美しい自然環境を誇りとしてきた県民の心の奥壁に空しさを助長するばかりです。

被害は平成 8 年度を境に減少傾向を見せましたが、同 12 年からは再び拡大に転じ、異常としか言いようのない状況と認識します。

このままでは、県内海岸部はもとより、内陸部の貴重な松林が、或いは庭木の松までもが枯死、枯木化を待つ危機にあります。

一例を秋田市から由利地方に至る海岸部に見ますと、全てと言っていい松林に緑は跡形もなく、哀れな枯木がによきによきと無残、異様な姿で林立しております。栗田定之丞や賀藤景林など歴史に名を残す先人たちが、飛砂と風害から生活、生産を守るために植林した貴重な緑の遺産が、瞬時にして失われ、手をこまねいていると映るのが現実です。

秋田県、県内各市町村では、それなりの防止対策を推進してきたわけで

すが、結果は残念ながら現状の通りです。今や、喫緊の課題として被害の拡大防止と復元に最大限の努力を傾注すべき時期と判断します。

秋田県が策定した『2020年 秋田の姿』には、「子どものころから環境の大切さを認識し、生産や産業など人間活動のあらゆる場面で、環境保全を優先するライフスタイルが確立され（中略）環境保全の実践活動が積極的に展開されています」と記述されております。

『今、為さずして』の思いです。一日も早く、次の被害に直結する枯木の伐倒駆除を優先的に実施し、先ず子どもたちの日常視野から哀れな郷土の姿を除去することこそが、環境教育の最優先事項ではないかと考えます。いつまでも記憶に残る原風景を、緑豊かな自然環境として止めて欲しいと願うからです。そのうえでの植林作業の実施は、子どもたちも含む県民参加の一大事業として展開が可能でしょう。昭和20年代の荒れた里山での学校植林が、今、豊かな秋田杉として蓄積されている情景を思い浮かべます。

秋田県では平成19年に国民体育大会が開催され、翌20年春には全国植樹祭が内定しております。目玉の観光地、国定公園・男鹿半島の景観さえも無残の一語に尽きます。このままでの観光地の姿を、現状のままでの秋田の自然を、全国から集まる人々の目に晒すことは、いかに自然生態系のなせる要因が大きいとはいえ、余りにも無策をさらけ出すようで悲しくてなりません。

県内市町村でも松くい虫から町を守る条例を制定した町、伐倒駆除を急ぐために山林所有者の特定を呼びかけている町もあります。民間でも『松くい虫から松を守ろう』と真剣に取り組んでいる団体もあります。秋田県が2003年4月から施行した『水と緑の条例』もまた、緑豊かな郷土の建設を願ったものでしょう。しかし、財政的な限界もあって、実行は十分とは言えません。

この際、土地所有区分の枠を超え、「オール秋田」の認識に立って従来の対策を大胆に踏み込み、平成17年度から県政の重点施策に位置づけ、県が主導して短期間に強力、かつ広範な事業展開による『緑あふれる郷土秋田』の再現を強く期待するものです。郷土の先覚はふるさとの姿を『山

水みなこれ詩の国秋田』と謳い上げ、後世に残しました。それは秋田県民にとって無二の誇りでもあるはずです。誇り得る姿の取り戻しへの挑戦は、必ずや県民各位の賛同を得られるものと信じて疑いません。